

# 京城「鵲巢居」の思い出

## 金谷要作

私は大正八年東大農学部を卒業して、ただちに京城の朝鮮殖産銀行に入行し、かたわら

総督府中央試験所の嘱託を兼務したのであったが、当時既に徳富蘇峰先生は在鮮せず、先生は明治四十三年日韓両国が合併して寺内毅元帥が朝鮮総督になられてから、大正五年総督を辞任するまでの数年の間、総督の懇請によつて、新に発刊された日本字新聞の京城日報社の運営に當つて居られたと聞いていた。

その当時、蘇峰先生は旧王宮景福宮の裏山の孝子洞の北門に通ずる所に居を下し、鵲巢居と名づけて居られた。付近は累々たる岩塊の合間に溪流のせせらぎが聞え、時おり鵲の鳴き声が耳を驚かすほかは、全く静寂な幽邃境であった。そこにポツンと建った温突三間ほどの小さな古い朝鮮建に蘇峰先生は住まわられていた。それから金サンとかいっただ僕が

別棟に住んでいた。

蘇峰先生が内地に帰られてからは、管理人の某が勝手なことをするので、殖銀課長の渡辺幸さんが世話を引受けて居られた。その渡辺さんが、東京駐在理事に榮転されてからは、渡辺さんに後事を頼まれて私がお世話することになった。昭和八年頃のことである。そして蘇峰先生が東京青山に青年会館を建てられるにあたり、在鮮の財産を処分して、その資金の一部にあてたいとの御意向を通じて

きたので、北門外の山畑や京城西北部義州街道沿いの山林と、京城の南部南山裏の梨泰院の土地を、先ず売却することにした。山畑や山林はたやすく処分できたが、梨泰院の土地は、文祿慶長の役で朝鮮に出征した日本兵が住みついたという伝説のある部落で、数十戸の細民の集落なので処分が困った。相手方に

迷惑をかけぬようとの蘇峰先生の御意向を汲んで、面倒であったが、細かく分割して、それぞれに住民に格安に分譲した。住民は喜んでた。ただ鵲巢居だけは、蘇峰先生の遺跡として後世に残そうとの蘇峰会の人びとの希望で処分せぬことにした。

その鵲巢居に一本の三尺ほどのツゲの杖が残されてあった。留守居の金サンの語るところによると、蘇峰先生が朝夕について散歩されたものだ、金サンが片目を細めて歩く蘇峰先生の姿を真似てみせるので、無二の記念品と、蘇峰先生におねだりして、私が頂いた。その杖は後年敗戦引揚の際リュックサック担いで杖ついて、内地に持ち帰ったのであるが、どうしたか今は手許にない。まことに残念なことである。

昭和十四年ごろ渡辺幸さんが殖銀副頭取に榮進されて、再び京城の本店に戻られてから、蘇峰会の人びとはかつて、鵲巢居の遺跡を永世に残そうと、鵲巢居の後方にあつた巨大なる自然石に、蘇峰先生の雄渾な筆になる鵲巢居詩文を彫み込んだ。その開碑式の際に石刷の縮小版と在鮮中の詩文を集めた和綴の一冊を記念に私も頒布を受けたが、これも

残念にも引揚の際残して来てしまった。

その後戦争が始まってから、鶴巢居と地統きの料亭白雲荘（市内清香園の別荘）の女将が、蘇峰先生の遺跡として、ありのまま永久に責任をもって保存するからと、たつての希望があったので、蘇峰会の人びともこれに譲渡して管理を委した。

\*

蘇峰先生と私とのつながりは、前述のようなことから始められたわけで、私が銀行の用事で上京し、西銀座の民友社に蘇峰先生を訪れる時は、いつも喜んで迎えられ、渡辺さんや中央朝鮮協会の常任幹事の中島司さん（元京城日報社記者殖銀調査役）らとともに、西銀座のAワンで御馳走にあずかったりした。蘇峰先生は座談がたいへん御上手で、食事中もユウモアを交えて賑やかに話されるのが常であった。

その一つに、銀行の方々は、金には不感症になっていて、いかほどの大金を見てもビックともせぬが、常人には大金は全くの魔物といつてよい。日露戦争が終つて、従軍記者にも、それぞれ功労金が下附された。A記者は夢にも思わなかった金一千円也の大金を握つたの

で、頭がヘンになって、一日中二頭だての馬車を借り切つて、東京市中を乗り廻したあげく、帝国ホテルに乗り付けて、折柄いあわせたベルギー公使夫人のスカートに人參を押し込んで、国際問題をひき起したことがありましたよ。金はほんとうに魔性ですね。

朝鮮の土地の処分が片付いたあと、上京した際、秘書の並木仙太郎氏から「蘇峰先生は大変感謝している。御礼を差し上げたいと言われているから、何なりとも言うて下さい」との話があったので、「先生の書と、出来るなら新日本国民史を」「国民史はまだ全巻が刊行されて居らぬから、蘇峰叢書を差し上げましょう」と「蘇峰贈呈」の朱印を押した十数冊のものを頂いた。それから時経て、京城の自宅に一書を送り届けて頂いた。それは

誰謂一身小安如泰山

誰謂一室小寛如天地間

蘇峯迂人

という雄健な筆致のもので、有難く頂いた。またある時上京して、民友社にお伺いした折には、机上で色紙に東亜共榮圏をうたつたらしい近作の詩を書いて下さったり、ある時は、書架から部厚い一書を取り出されて、表

紙の内側に「金谷賢契惠存 蘇峰迂人」と記されて、「これを読んで下さい」と贈られた。それは衰田胸喜著『昭和維新論』であった。

また私が京城に新屋を建築した時に、贈られたのは、「志存君国」という横額の雄渾な大文字であった。以上のものは引揚げの際に失ってしまったが、唯一つ「誰謂一身小……」の掛軸だけは私の一番好きな文句で、逆境にあつて失意の時は力づけ、順境にあつて得意になり勝ちの時には戒めとなる有難い一書であるから、これだけは肌身離すまいと、引揚の際にも軸面を切り抜き、リュックサックの底中に深くしのばせて、持ち帰ったものである。

私は老齡の隠退の身で、もはや成すべきすべもないが、末子光久が住谷先生の薫陶の下に先般同志社大学を出たので、蘇峰先生と同志社との深き縁故を聞き、同人に与えることとした次第である。

改装の掛軸を巻き終えたところに「金谷賢契惠存 蘇峰迂人」とあるのは、前記の『昭和維新論』の表紙の内側に先生が記されたものを、切り抜いて引揚げの時持ち帰ったのを、張り付けたものである。